1

海鳴りが嫌いだ。

遥か彼方、気も遠くなる程の遠くから、次次と押し寄せる閑寂として脅迫的な轟音。

いったいどこから聞こえて来るのか。何の音なのか。何が鳴っているのか。鳴っているのは水か――将また風か。それとももっと別のものなのか。果てのない広がりや、無意味な奥行きばかり感じさせて、ひとつも安心できない。

そもそも、海が嫌いだ。

海のない在所で育った私は、初めてそれを見た時に、どこからどこまでが海なのか、そのことばかりを考えてしまった。

海の主体は水なのだろうか。それとも、その下の海底なのだろうか。

先ずそこが瞭然しない。水に浸っている地面は最早海なのだろうか。

ならば、あの忌ま忌ましい波と云うのは何だ。

波もまた、考えるのも厭になる程彼方から畝畝と押し寄せては去って行く。それが、今もひっきりなしに、世界中の海岸に同じように寄せては返しているかと思うと、気が狂いそうになる。ならば海は、その領土を休むことなくぶよぶよと広げたり狭めたりしていることになるからである。

そもそも海岸などと云うものは、砂浜であろうが岩場であろうが、これは紛うことなき陸地である。地面と一続きになっていて、ここからが海の領土です、などという境界はないのだ。

それでは海水の方はどうかというと、これはあくまで透き通ったただの水なのだ。低地に水が溜まっているだけで、本来何の不思議もない。

それなのに、透き通っている筈のそれは、いつの間にか碧い、薄気味の悪い海の色にその姿を変えて、圧倒的な自己主張を始める。

思うにそれは、その馬鹿馬鹿しい質量の力に負うところが大きいのだろう。透明な、存在すらもが怪しい果敢無気なものであっても、これだけ集まれば某かの主張を始めるのだ。海が小さければそれは海ではない。ただの水だ。ならばその夥しい水の量こそが海を海たらしめていると云うことだろうか。

何と云う馬鹿げた主張だろうか。

私はまた、自分の背が立たぬ程の深い海の存在に就いても考えが及ばなかった。
否――背が立たぬどころではない。私の背丈の数倍、数千倍の深さの海があるなどと云うことは、正に常軌を逸した与太話としか思えなかった。しかしそれは事実だった。
足下に何もない状態。とめどなく落下して行く恐怖。これ以上畏ろしいことがあろうか。高いところから落下するのとは訳が違う。幾ら高所から墜ちたとしても、必ず最後には地面が待っている。しかし海は違う。終わりは、ひょっとしたら、ない。
深海には光すら届かないという。
透明な筈の水が、何故光まで遮ってしまうのか。理解に苦しむ。
つまりここでも圧倒的な量の意思表示が光を遠ざけているのだ。
厭になる。
対岸もない。おまけに底もない。
海は嫌いだ。怖い。

海の近くに住むようになってもう何年になるだろうか。ここに来て以来、だから一秒たりとも気持ちが安らいだことはない。何しろ海鳴りは、どこにいようが、何をしていようがお構いなしに聞こえて来る。おまけに止むこともない。

昼間はそれでも何かと気が紛れて、どうにか遣り過ごしている。
しかし夜は困る。
夜具に入り目を瞑ると、それは容赦なく訪れる。他に一切音はない。暗闇は仮令目を開けていたとしても私から世界を奪ってしまう。だから布団を被ろうが耳を塞ごうが、もう変わりはない。夜が来る度、私は深海に身を投じるような不安に苛まれる。
眠ろう、眠ろうとする。
そして夢を見る。

※

私は海に漂っている。
畳も布団も闇に溶けている。
ゆっくりと、ゆっくりと沈んで行く。
とても息がし難い。空気が、有機物の混じった塩辛い液体に変わっている。水中であるにも拘らず、何故か呼吸できぬ訳でもない。ただ鼻から耳から液体は侵入して来て、肺の腑が一杯になる。苦しくはない。不快なだけだ。
どこまでも、いつまでも沈み続ける。

得体の知れない海藻やぬるぬるとした浮遊物が身体のあちこちに触れる。その度にびくりと痙攣する。それでも下降は止まることを知らず、私はどんどんと沈み続ける。

光などもう永遠に届かない。

声を出そうとしたところで肺の芯まで海水に浸っているから泡のひとつも出ない。幽かに喉元の水が震えるだけである。

何かいる。

勿論見えはしない。気配だけしか感じられぬ恐怖。

何だ！　手を翳し、足を振っても虚しく水を掻くばかりで何も解答は得られない。

水は空気より遥かに粘質で、蹠けば蹠く程身体に纏わりつき、そのうち肉が剝れ出す。

水に浸かってすっかりふやけてしまった身の肉が、もろもろと砕けて海水に溶けて行く。

拡散した私の細かい肉片で、周囲の水が濁る。濁水はもやもやと形を変え乍ら上方に去って行く。私を置き去りにして、私の身体だったものが遠ざかって行く。

私はそのうち、すっかり骨だけになる。身が少し軽くなる。ただ、浮かび上がることはなく、それでもまだ沈み続ける。

海水に洗われ、真っ白い骨になっても、何故か四散することなく、私は沈んで行く。恐怖が限界に達して大声を上げるが、頸骨がかたかたと震えるだけだ。

そこで目が醒める。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。